

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

呉人 徳司



学位申請者 青木 隆浩

論文名 モンゴル語の格と共起する動詞・名詞の意味的特徴

結論

青木隆浩氏から提出された学位請求論文「モンゴル語の格と共起する動詞・名詞の意味的特徴」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は呉人を主査に、副査として本学のアジア・アフリカ言語文化研究所の児倉徳和准教授、明海大学の梅谷博之准教授、本学の内原洋人准教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、モンゴル語の動詞の格共起の傾向について、①格の持つ意味、②動詞の意味分類、③名詞の意味分類の3つの観点から分析を行ったものである。モンゴル語の格語尾には「主格 無語尾（～が）」「属格 -IJn（～の）」「対格 -IJg（～を）」「与位格 -D（～に／～で）」「道具格 -AAr（～で）」「奪格 -AAs（～から）」「共同格 -tAj（～と）」「向格 -RUU/-LUU（～へ）」（なお形態素における大文字表記は母音調和などによる異形態のあることを示している）が存在する。それぞれ概ね括弧内の日本語訳に対応する機能を示す。しかし、日本語では対格「～を」で表現するところをモンゴル語では奪格を用いて「～から」で表現したり、与位格を用いて「～に」で表現したりする場合があります。これらは日本人のモンゴル語学習者にとっては理解が難しい点である。本稿は対象を与位格、道具格、奪格、共同格の4つに絞った上で、モンゴル語の格語尾がどのような動詞と共起し、どのような動詞の場合に対格ではなく奪格や与位格の対象物を取るのかについて、コーパス調査、ネイティブコンサルタントへの調査及びアンケート調査によって明らかにした論考である。

本論文の構成は以下のようになっている。

第1章ではモンゴル語の格に関する先行研究をまとめている。Kullmann and Tserenpil (2008 [2005])、清格尔泰 (1991)、岡田・向井 (2016[2006])、《新蒙汉词典》编委会 (2002[1999]) では、モンゴル語の格がどのような動詞や名詞と共起す

るのかについて言及している。ただ実際にはこれらの先行研究で取り上げられている動詞以外にも、特定の格と共起しやすい動詞が存在する。さらに、それぞれの格が共起しやすい動詞や名詞にはどのようなものがあるのかという意味的傾向を明らかにした研究は不十分であることを指摘した。

第2章ではコーパス調査を行うにあたっての例文を選定した基準と、必要な例文を効率よく抽出するための各種の関数について説明している。本稿で研究対象とするのは「格語尾と共起する動詞と名詞の傾向」であるため、コーパスで格語尾を検索文字列として例文を検索するが、その際にいくつかの問題が生じる。例えば、①格語尾は短いため、同じ文字列を含む関係ない単語も検出してしまう、②複合動詞や格語尾の後が著しく長い文などは、格がどの動詞に関係しているのかの判断が難しいなどの点が挙げられる。そこで「格語尾の直後の動詞は単独で終わるもの」のみを分析対象とし、Excelの各種関数を用いて該当する文を選び出した。本章ではそれらのExcelの数式が言語学研究における大量言語データ処理への応用の可能性があることを実証している。

第3章ではコーパス検索から抽出した例文について、それぞれの格語尾と共起した動詞を出現数の多い順に一覧表とし、さらにそれぞれの格における動詞と名詞の意味的分布の特徴についてもこれを出現頻度順に示した。これらのデータに基づいて個々の例文を分析するとともに、適宜コンサルタントへの聞き取り調査や複数の母語話者へのアンケート調査を実施し、より詳細なニュアンスや他の格への置き換えの可否を明らかにしている。

与位格語尾は「移動」に関する動詞と「場所」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。先行研究で与位格支配動詞として取り上げられている *itgex* (信じる) については対象物を対格で表す例も現れた。この点についてアンケート調査を行った結果、これらの格の選択には方言による違いおよび動詞の他動性が関係しているということが明らかになった。

道具格語尾は「発話」に関する動詞と「抽象物」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。中でも *xelex* (言う) と *duu* (声)、*caraj* (顔)、*bajdal* (様子) の組み合わせが多くみられ、いずれの例でも言葉を発した時の様子を表すために道具格が副詞的に用いられていた。さらに道具格には「増減」に関する動詞と共起して増減分を表す用法のあることを明らかにした。

奪格語尾は「移動」に関する動詞と「場所」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。奪格と共起した動詞に特徴的なものとしては、「動作」「直接影響」「授受」に関する動詞が挙げられる。「動作」「直接影響」に関する動詞の中でも *tatax* (引く)、*barix* (つかむ)、*ujax* (結ぶ) といった動詞は、対象物に奪格語尾を用いると「～の一部を～する」という「部分格的用法」を表す。対象物を

対格で表すことも可能であるが、その場合は「全体を～する」の意味を表す。例えば「服をつかむ」を表現する場合、奪格では「人が着用している服をつかむ」ことを表し、対格では「置いてある服をつかむ」ことを表すことを母語話者へのアンケート調査によって明らかにした。さらに奪格については「感情」に関する動詞、中でも特に「忌避」を表す動詞と多く結びつき、好ましくないと感じる対象を奪格名詞で表すことが明らかになった。

共同格語尾は「交流」に関する動詞と「人」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。共同格語尾で特徴的なものとしては、「関係」に関する動詞が挙げられる。「関係」に関する動詞ではコピュラ動詞と共起した場合、共同格語尾がすべて「～持ちの」の意味を表す *propriative suffix* (所有接辞) として機能していた。しかし、共同格語尾が「～と共に」の意味を表す *true comitative* (本物の共同格) であるのか、「～持ちの」の意味を表す *propriative suffix* (所有接辞) であるのかの区別は、形の上で判断することが難しい。そこで本稿では両者を区別する判断基準として、「①共起する名詞が有生物であるか否か」「②動詞の相互性が高いか否か」「③動詞の意志性、他動性が強いのか否か」に注目することが効果的であるとした。そして、①概ね名詞が無生物で、②動詞の相互性が低く、③他動性・意志性も弱い場合に「形容詞接辞」ないし *propriative suffix* となる傾向があり、特に「名詞が有生物か無生物か」という点が両者の区別に最も影響しているという可能性を指摘した。

第4章では結論をまとめるとともに、様々なジャンルでの例文の収集と分析の必要性について述べ、特に内モンゴル諸方言における自然談話資料による格の使用実態調査の必要性を説いている。

審査の概要及び評価

上記のように青木隆浩氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、モンゴル語の動詞の格共起の傾向を詳しく解明することに成功している。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下の点である。

- ・コーパスデータに基づき、モンゴル語の4つの格について、共起する動詞と名詞を客観的・定量的に明示することに成功している。
- ・研究方法がきわめて丁寧に説明されており帰納的・実証的に分析している。
- ・例文を丁寧に示しているので具体的な検討が可能で、その中には非常に興味深い例も収集できている。
- ・日本語と類似しているといわれるこの言語に関して、格体系について日本語との異同も

わかりやすく提示されている。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・テキストのジャンルの偏りに起因する出現率の高い動詞によって全体のデータの傾向が大きく左右されてしまった面がある。
- ・本論文の研究方法では扱いきれていない動詞直前位置でない名詞項の格や機能についてさらに分析していく必要がある。
- ・名詞の意味分類に関して、実際の文脈において実現している意味にさらに注意を払う必要がある。
- ・モンゴル語においては使役が語彙的な自他として機能している場合も多いので、使役形の動詞の例を排除した点には問題が残る。
- ・このタイプの言語では連続している面があるとはいえ、文法項と付加項を分けて考察してもよかったのではないか。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。モンゴル語文法における他の問題点に関する記述研究の進展、モンゴル語の格についての対照研究、ひいてはモンゴル語文法研究の成果のモンゴル語教育への応用に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者青木隆浩氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。